
みんな学ぶ気です？

静岡運転所

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みんな学ぶ気です？

【Nコード】

N6530U

【作者名】

静岡運転所

【あらすじ】

那智広裕は鉄分多めの普通の高校二年生。彼を取り巻くは快活な幼馴染を始めとした個性的なクラスメイトたち。さらにそこに転校生がやってきて広裕の日常は毎日が波乱万丈！さらには新豊学園全体を巻き込んで学園は大騒ぎ！

普通のように普通じゃないちょっと鉄分の入った学園コメディ、ここに登場！

第一話 初めての、部活（１）

第一話 初めての、部活（１）

桜吹雪が舞っている。

月初めの天気予報では『今年は暖冬の影響で早めに散ってしまうでしょう』とか言っていたが、四月八日の今日も俺の通う新豊学園しんほうがくえんの敷地沿いに植えられた桜の木はピンク色に染まっていた。昨日は入学式があつて新入生歓迎ムードに沸き立っていた学園も、入学式前の静かな日常に戻りつつある。もっとも静かといつてもそれはあくまでも祭典イベントと比べて静かという意味で、決して学園全体の活気が収まっているわけではない。敷地の半分近くを占める運動場からは野球部のむさ苦しい声が、体育館からはシューズのグリップが出すあの独特の音が聞こえてくる。私立の高校にありがちな自由な校風と縛るものも縛れていない校則 - 良くも悪くもルールにとらわれない - のせいか祭典となると異常な盛り上がりを見せるのだ。

そんな祭典大好きな新豊学園にはもう一つの顔がある。卒業生の実に八十パーセントが大学へ進学、有名どころの大学にも何十人も出す県内随一の進学校なのだ。愛知県のちょうど真ん中、日進にっしんと豊田とよたの間という非常に中途半端な場所にありながら新豊学園しんほうがくえんには県内から千人近い学生が集まっている。

しかし現実問題、新豊学園のある明岡市あきおか以外から通う生徒は少ないというのも、明岡が中京圏の中核都市の名古屋のベッドタウンとして開かれ、新豊学園はそこに付随する学校として作られたという経緯がある。この学校は元々名古屋東部に開かれた明岡ミュータウンの設備の一つなのだ。現にかつてあつた新豊学園の初等部・中等部は、それぞれ明岡市立の小学校と中学校として公営化されて、今は高等部しか残っていない。そのため俺のように明岡に住んでいる生徒が殆ど。遠くても二つ隣の猿投さなげや八草やぐさくらいまでで、それより遠い生徒は新豊

学園の近くにあるという寮（俺は見たことがないが……）に住んでいるらしい。名目上は私立の学校だが、どうみてもシステムは公立の学校と一緒だ。

ただ一つ県立の高校と違うことがあるとすれば、それは金。なんでも田んぼや畑が広がっていた地区を買い上げて住宅地にしたため、その土地を持っていた地主やニュータウンプロジェクトに携わっていた役人などが『それが将来のためならば』と大金をつぎ込んだそう。万単位、億単位、はたまた数十億単位……その金額は通っている俺たちを含めて誰も知らない。一説には「学校の地下にある巨大金庫には一億円以上のお金が眠っている」と言われているが、まだ都市伝説の域を出ていないのが現実だ。

その新豊学園の敷地の西端に、アパートのような二階建ての建物がある。通称『部室棟』。部員の数が増えたとはいえないような弱小文化部がいくつも身を寄せ合っている。創立当初は「質実剛健」をモットーとする男子校だった

新豊学園が共学になったのはそう新しい話ではない。高度経済成長期の末期。ニュータウンへの入居希望者の第一群が明岡市に新天地を求めやってきた頃だ。だが男子校特有の熱血の気概はまだ失われていない。新豊学園では今でも運動部のほうが優勢で、大体の文化部はアパートサイズの部室と（運動部と比べると）少ない部費とで細々と活動している。

俺の所属する部活の部室は、その二階の突き当たりにあった。

ここの部室は見た目のみならず中身までアパートそのものだ。1Kの部屋から風呂・トイレ・キッチンを取り除いたような、一続きの部屋になっている。脇には本の詰まった金属製の本棚^{ラック}が、そして真ん中には会議で使うような折り畳み式の机が組み合わさった大きな一枚のテーブルが鎮座している。

テーブルの上に据え置き状態のノートパソコンを叩くのをやめて、俺は顔を上げた。

「今日から仮入部か」

「え、そうなの？」

目の前にいる少女が意外そうな顔をする。北浜結那きたはま ゆうなという名のつくこの少女は俺の幼馴染であり、数少ない部員の一人でもある。茶色がかったショートヘアが窓から吹き込む春風に揺れている。女子高生としては平均的な背丈。整った顔立ちは明るい性格を反映しているようにも見える。俺が言うのもなんだが、なかなかの美少女だったりする。

「どんくらい入るかなあ」

結那と机を隔てて反対側に座る上市かみいち フルネームは上市董すみれ が

腕を組んだ上に顎を載せてウキウキ顔で笑っている。これからうちの部活が存続できるかできないかの正念場だというのに。まったく呑気な奴だ。顔を揺らす度に、上市の最大の特徴である、肩の高さまで伸びるポニーテールがひよこひよここと生き物のように跳ねる。現在部室にいるのは三人。うちの部活のメンバーは今のところこの三人だけだ。

「誰か来ないかなあ」

「来るといいんだけどねえ……」

「……、ああ、すぐわかる」

「ちよつと広裕？何で今私を見たの！？」

「いや、別に意味はないけど」

結那から目をそらす形で、視線は部室の入り口に向かう。これもアパートにありがちな鉄の扉だ。薄汚れた鉄くろがねの門番は新たな客人を迎え入れる様子もない。

「ま、去年の感じなら一人二人は入るだろ」

かの扉の向こうでは白いプレートが春風に吹かれていることだろう。俺たちの部活の名を記した、大切な看板プレートが。

即ち、『鉄道研究部』と。

「鉄道研究部ってどんな部活？」と聞かれるのは日常茶飯事なので、俺は俺なりの回答を用意している。簡単に言ってしまうえば鉄道を研

究する部活だ。え？何の答えにもなっていないって？そんなことを言われても他に答えようがない。鉄道研究部　略して鉄研部の活動目的は『鉄道を極める』ことに尽きる。鉄道を知り、鉄道を見て、鉄道に乗り、鉄道を撮る。鉄道を骨の髄まで味わうのが俺たち鉄研部の骨子だ。

そんな部活だから、畢竟ここは鉄道好きが集う場所となる。逆に鉄道に興味のない一般人が大勢を占めていたら驚きだ。この『好き』というのはただ鉄道に乗るのが好きとか、そういう次元じゃない。鉄道を五感で感じる事ができて初めて鉄道好きと語れる。これはもはや理屈じゃない。だって好きなものは好きなんだから。俺はもちろんのこと、結那や上市も鉄道好きに含まれる。手前味噌ながら、鉄道好きの美少女なんてそうそういるもんじゃない。そもそも女性の鉄道好きというだけで数が絞られる。大半は中年や還暦を越えたいわゆる団塊世代だ。今でこそデジタルカメラという便利なものがあるけれど、フィルム式カメラが全盛だった時はそうもいかない。カメラを一式揃えるのにも一定の収入が必要だった。カメラを持っていたのはカメラマンや一部のアマチュアだけ。高校生どころか若手の社会人でさえ簡単に手を出せる代物ではなかったのだ。それに加えて、まだＪＲが国鉄だった頃は、鉄道の写真を撮ること自体が嫌われていた。駅のホームでカメラを構えていると駅員に捕まってカメラの中身をチェックされるのもしばしばあったらしい。こんなことを知っているのも鉄道写真家だった結那のお父さんから聞かされたからなんだが　これは今するような話じゃないな。

ただ、鉄道好きが大勢を占めているというのは、裏を返せば鉄道好きでない一般人は寄り付こうとしてくれないという意味でもある。別にうちの部活は鉄道好きでなくとも大歓迎なのに。一般人には『鉄分』アレルギーでも持っているんだろうか。悲しいことに新豊学園では、部員は最低五人以上必要と決められている。なんとしても部員をあと二人は　鉄道好きであるかどうかにかかわらず　集めなければいけないのだ。とてもじゃないが選り好みしている場合

じゃない。

この危機的状況下で部長をやっているのがこの俺、なち ひろやす那智広裕だったりする。つい先日までは先輩が二人いてそれぞれ部長と副部長についていたんだが、年度が替わる春休みを持って引退。空いてしまった役職を俺たち新二年生に割り振ったところ俺が部長になってしまった。なんで俺が、とは思ったものの結那と上市を見てすぐ思い直した。この面子の中で部長の職務を全う出来そうなのは、鼻屑目に見ても俺しかない。

「とりあえずこいつを片付けないとな」

俺は再びノートパソコンを開いた。やりかけの仕事が残っているからだ。

鉄研部の活動は基本的にこの部室だ。そりゃ本物の鉄道に乗るのは楽しいけど、毎日学校帰りにやれる活動じゃない。毎日部室に集まって個人個人で鉄道について調べるのが鉄研部の通常の活動になってる。幸いにして部室には紙媒体からDVDまで数々の資料が揃っている。そのほとんどが先輩達の持ち寄った品々だ。軽く漁れば『東北新幹線開業』とか『こんにちはJR』とか『さよなら』とか『まつかぜ』とか簡単に見つかるはずだ。本棚から今にも零れ落ちそうだがいくらあるのかのは現部長の俺でもわからない。量的にも金額的にも、俺たちにとっての宝の山なのだ。もちろん最近はいんター何とかという便利なツールも登場したが、これだけ資料が揃っているとわざわざネットを開くのが億劫になってくるぐらいだ。それに情報の正確さはネットの比ではない。

というわけで鉄研部の活動はいつもは慎ましやかなものになっている。しかし、鉄道好きである以上鉄道に乗りたくなるのは必然。そのため鉄研部では月に一度『研修旅行』を行っている。運動部で言うところの合宿に当たる大事な活動だ。仰々しい名前だけどその実態はなんのことはない。ただ鉄道に乗りに行く旅行だ。近場なら日帰り、遠くなら数泊の長旅になる。中身は地域の壁を抜けて全国各地の鉄道を訪ねるというシンプルなもの。目的は一応『鉄道に対す

る見聞を深めるため』となつてはいるが、鉄道好きとしては乗つてしまえば楽しいわけで、この目的は完全に建前になつている。費用は部費という形で学校が受け持つてくれるから何も問題はない。

ただ、あくまでも『研修』旅行。薔薇の花には棘とげがあるように、それなりの優遇措置には裏がある。研修旅行が終わつた後に『研修レポート』という形で顧問を通じて学校に提出しなければいけないのだ。研修旅行がただの旅行にならないようにするためにと、学校側の旅費の負担と等価の関係になつている。聞けばレポートの出来が粗末だつたために自分で負担する羽目になつた年もあつたとか。部長の仕事の中にはこのレポートも含まれている。部長としての初仕事だけに気は抜けない。春休みがあけてから今日まで、こうしてパソコンとにらめっこをする日々が続いている。部員の件も重なつて頭が痛い。

運動部が準備運動を終えたのか、グラウンドが俄かに騒がしくなる。

俺は再びレポートの続きを書こうと

ドンツ、ドンドンツ。

鈍い音が部室に響き渡る。誰かがドアを叩いているようだ。

「すみませーん」

耳に優しいソプラノに、雑誌に顔を寄せていた二人も急に顔を上げた。

「誰か来たのか……？」

「もしかして、入部希望者！？」

椅子を引き倒さん勢いで結那が立ち上がる。考えてみれば部室棟の二階の端にある鉄研部てつけんに用がある人間なんて限られている。こ、これは期待してもいいのか……？

「はーい……あ」

元気に満ちた結那がドアを開け放つと、俺たちの前に訪問者の姿が露わになる。西日に浮かび上がるのは一人の少女のシルエツト。逆光で黒一色モノクロだつた影はゆつくりと、本来の色を取り戻していく。

夜闇が広がつたような長い黒髪。制服から覗く透き通つた肌。切れ

長の眉に、すつと通った鼻筋。部室の入り口と俺の座る席は離れているにもかかわらず整った顔立ちが目を惹く。いわゆる正統派の大和撫子といった感じの出で立ちだ。それでいて、出るところは出てひっこむところはひっこむ、いわゆるモデル体形。グレーを基調とした新豊学園の制服も野暮^{うち}つた^くなく着こなしている。道理で纏っている空気が新豊学園の他の女子と違うわけだ。俺たちと同じ高校生とは思えないくらい美人だった。

……して、こんな超絶美人はうちに何の用なんだろう？

「えーつと……」

超絶美人（仮称）の登場に結那も驚きを隠せていない。次の言葉を必至に探す結那に、彼女は穏やかな微笑を浮かべて。

「あ、入部届けを出しに来たんですけど」
につこりと、そう、のたまった。

うちの部室にはなぜか給湯設備がある。設備といっても簡素なシンクといまどき珍しい電熱線ヒーターだけだが、そもそも元々十畳ぐらいしかない部室に給湯設備をつけたこと自体が謎だ。ただでさえ大量の資料の詰まった本棚が部室を占領しているから実質八畳間取りをアパートに真似たのは置くとしても、なにも給湯設備はいらないような……

とはいえ、客人にお茶を出すことができるのもこの給湯設備があつてこそ。

「はい、どうぞ」

結那が慣れた手つきで超絶美人（仮称）の前に湯のみを置く。部屋の中央に縦に置かれた机を挟んで、俺の丁度真向かいに腰を落ちつけた超絶美人（仮称）は結那に一礼すると湯飲みを口元に持っていて。なんというか、一つ一つの所作がとても上品だ。大酒飲みのように湯飲みを叩きつける上市とは比べるまでもない。と、彼女が湯飲みを覗き込む。どうしたんだろう。

「……これ、お茶柱立ってないわよ」

「おい結那、お客さんに茶柱の立ってないお茶出すとか失礼だろ」
「初めて聞いたよそんなの！」

なんてユーモアのある人なんだろう。それにひきかえうちの結那と
きたら……

「広裕、はい。董も」

「あ、ありがとう」

結那がお盆に湯飲みを三つ載せて戻ってきた。客人のついでに俺た
ちの分も淹れたようだ。

「はい、広裕の分」

「あいよ……ん？」

「どうしたの、広裕」

「結那……俺の湯飲み、どうみても出がらししか入ってないんだが」
「なんか文句でも？」

結那が目を細めて睨んでくる。意地でもこの出がらしをお茶と言
い張るつもりらしい。

「いや……別に……」

これ以上言ったら物理的ダメージを受けそうなので視線を結那から
回避。この程度で蹴られてたまるかつての。

再び俺の目の前に座る彼女に視線を戻す。

「えーっと、なめがわ滑河さんでよかった？」

俺の手元には今し方彼女からもらった入部届けがある。なめがわときこ滑河時子と
いうのが今俺の向かいに座っている彼女の名前らしい。何気なく見
ていたら学年の欄に目が留まる。俺たちと同じ二年生のところに丸
印がつけてあった。あれ、ひょっとして転部希望？でもそれなら入
部届じゃないよな。新豊学園は一年と二年はどこかの部活に入らな
きゃいけないから、この時期の二年生は名目上でもどっかの部活に
所属してないとおかしいんだけど……

「あれ、滑河さんって去年部活はどうしてた？」

「あ、私は」

「広裕、滑河さんはここに来たばかりだったば」

急須とお盆（もちろん部屋備え付けのものだ）を置いてきた結那が戻ってくるや否や会話に割り込んできた。なんだよ邪魔するな……え？『来たばっか』？それって……

「もしかして滑河さん転校生？」

尋ねてみると滑河さんは穏やかに頷いた。隣のクラスに転校生が入ったって誰かが言ってた気がする。転校生は教員と違って全校生を前に紹介するわけじゃない。自分のクラスならともかく、違うクラスだと完全に判らない。ああ、そっか。昨日のHRホームルームの時に隣のクラスが盛り上がったたのはそれだったのか。いきなり壁越しに男子の雄叫びが聞こえてきたから何かと思っただけど、滑河さんが来て興奮してたとするなら納得がいく。

「……って、結那は知ってたのかよ」

「名前だけはね」

そっけない答えが返ってきた。まださっきの茶柱の件を気にしてるのか。

「……上市は？」

「滑河さんって娘が隣のクラスに来たってことぐらいしか」

二人の話を聞く限りお隣のクラスを除けば『謎の転校生現る！』ぐらいの情報しか出回ってないみたいだな。

「でもすごいよねー」

結那がどこか夢見がちな表情を浮かべる。

「あの特進クラスに編入でしょ？」

「えっ？」

驚いた表情のまま、俺は滑河さんに目を移す。

「まあ、そうだけど」

「……そっぴや隣は特進クラスだったな」

滑河さんはさも当然のように言っていたが、実際問題特進クラスに入るのはかなり難しい。新豊学園は一学年がおおよそ四百人近い大所帯だ。それを受けてクラスも一学年あたり九つあるが、特進クラスはわずか一クラス。人数も三十五人と限られている。入試の段階

で既に別枠になっている上に授業自体も通常のよりハイレベル。選りすぐりの秀才^{エリート}たちが集う、新豊学園のトップといってもいい。そんなところに途中から編入というのだから驚くほかない。当然編入するに当たってなんらかのテストがあつたはずだが、突破しているから今こうして目の前にいるわけで。なんだか目の前にいる滑河さんが恐ろしく見えてきた……

なんだか回り道をしてしまったが、再び入部届に眼を戻そう。……他には特に問題はないな。

「ま、入部届は顧問に出すことになってるけどね」

あはは、と軽く笑って入部届を裏返す。すると滑河さんの顔に影が差して、

「そつだったの？ごめんなさい。こっちが知らなかったばかりに……」

申し訳なさそうに頭^{しん}を垂れてくる滑河さん。本当に礼儀正しい人だ。物腰からなにか、あまりにも丁寧でこちらが気恥ずかしくなってくる。

「あ、滑河さんは気にしなくても大丈夫です。僕が出しときますんで」

ついには滑河さんが立って謝る事態になったので、丁重に断つてなんとか滑河さんを座らせた。

「広裕、なんで敬語？」

「え……いや、別に」

意識しているわけではない。なぜか滑河さんの前だと自然に敬語になつてしまう。もしかしたら滑河さんには敬語にさせる何か体がから出ているんじゃないだろうか。

「じゃあ滑河さんは今日から鉄研部^{てつ}の……あ、そつだ。滑河さんは鉄道好き？」

「もちろん」

当然とばかりに胸を張る滑河さん。鉄道好き^{てつ}の二文字で反応したあたり、本物に違いない。

「ちなみにお気に入りの車両は？」

「やっぱス力色の113かな。地元っていうのもあるかもしれないけど」

「113って、もしかして滑河さん、千葉から来た？」

「そう。千葉の八街やちまたってところ」

頭なづかの中では千葉県の地図が広がる。八街っていうとおおよそ佐倉さくわと成東の間か。大体見当がついた。時刻表を見続けてきたおかげか、駅がある都市なら大体の場所が掴める。俺はなんとも思っていないがどうやら普通の人にはない能力スキルらしい。県内外から多くの学生の集う新豊学園に入っても、その傾向は薄まる様子もない。初対面の人ひとが驚く率は実に九割八分を超えている。世間的には奇異の目で見られている。もっとも、授業で日本の地名が出てくことは滅多にないので使う機会も少ないわけだが。

「ああ、あそこね」

「……そんな台詞をさらっと言える広裕が怖いわ……」

「えっ、何が？」

「……」

結那が冷めた目線で俺を見据える。八街は特急も止まるから結那だって知っててもおかしくはないはずなのに。

「ほ、他には？」

「あとは183とか『なのはな』とか……」

滑河さんから名前が挙がったのはいずれも千葉にある幕張マサ車両センター所属の車両たちだ。いや、正確には所属しゆきんだったと言っべきか。183系も165系『なのはな』も国鉄。日本国有鉄道。JRの前身にあたる。からJRに受け継がれた車両のひとつだが、現在は183系が二本いるのみで残りは廃車になっている。千葉は国鉄の影響を色濃く残している地域だと聞いたことがあるが、その影響は確実に滑河さんにも及んでいるみたいだ。

「それじゃあ滑河さんも今日から鉄研部の一員ということだ」
結那が立ち上がって滑河さんに手を差し伸べた。

「これからよろしくね！」

差し伸べられた手に驚いたのか一瞬たじろいだ滑河さんだったが、
やがて

「こちらこそ、よろしく」

柔和な表情を浮かべて結那の手を取ったのだった。

思えば。

思えばこれが、全ての始まりだったのだろう。

転校生の入部という思わぬ幸運に喜ぶ俺たちは、まだそのことに気づかない。

開かれたままのノートパソコンのキーボードに、春風が運んできた桜の花びらがひらりと落ちる

第一話 初めての、部活（１）（後書き）

この作品では拙作『みんな乗る気です！』（以下「本編」とします）を補完する作品になります。都合上本編では書かれることのない学校での広裕たちの様子を書いていければと思います。本編と同時に並行で進めていく予定です。本編と一緒になにとぞよろしくお願いします。

第二話 初めての、部活(2)

第二話 初めての、部活(2)

「滑河さんが、入っただとおおおおおおっ!？」

教室にむさ苦しい男の叫びが響き渡る。四月の朝に似つかわしくない叫びに教室中が振り向いた。冷たい視線が四方八方から突き刺さる。叫んだのは俺じゃないのに。

「おい勝彦、もう少し声を落とせよ」

教室が静まりかえる中、俺は目の前の丸刈り頭を小声でたしなめる。こいつの名前は小本勝彦。おもとかつひこ頭からも判る通り立派な高校球児の一員である。創立以来の伝統を誇る新豊学園野球部には、男子部員は全員丸刈りにしなければならないと部の規則で決まっているらしい。任意ではなく義務だ。おかげでこの学園では丸刈り「野球部」という図式が上の学年から下の学年まで浸透している。

野球部に入っていないなくても丸刈りにすると野球部扱いされるのだ。噂では彼ら丸刈りのために丸刈り専門の床屋もあるらしい。いか他に明岡市内で丸刈りをする床屋があつたらまず潰れる。質の悪い冗談のようだが、実際に潰れたらしいから笑えな。ってそれは今問題じゃない。

問題なのは、勝彦が『模範的な』野球少年ということだ。極めて模範的な野球少年。やまひつぽか野球以外のことはことごとく頭から抜けていく、それこそ模範的なまでに馬鹿なのであった。今もこいつの頭からは周りの迷惑とか、そういったものが抜け落ちている。こんなんでも勝彦とは一年の時から同じクラスだった関係もあり親しい部類に入る。一年間で学んだことは『バカも三日で慣れる』ことぐらいか。

というか勝彦。まずお前に一つ聞きたいんだが、
「お前なんで滑河さんのこと知ってるの？」

なんでお前が一昨日入ったばかりの転入生の情報を持ってるんだ？
ところが勝彦は至って平然と、

「なんでもなにも、俺じゃなくてもみんな知ってるだろ」

「え？そうなの？」

俺は勝彦の隣にいる二人を見やった。どちらかというながはらと小柄な童顔少年と、爽やかな面をした優男。童顔のほうけんこが永原健呉。優男のほうは八広聡次郎やひろそうじろう。勝彦と同じく、一年からの付き合いだ。

「もちろん知ってるよ。知らないのは那智君ぐらいじゃないかな」

健呉がにこやかに告げる。俺を小馬鹿にしているように聞こえなくもないが。

「隣のクラスに來た転入生だろ？もちろん知ってるさ」

聡次郎の返事も似たようなものだった。

「……もしかして、広裕。昨日まで転入生が來たこと知らなかったでしょ」

「うっ」

健呉に痛いところを突かれ、俺は二の句を継げない。そして何も言わなかったことが決定打となったのか、

「やっぱりそっか……広裕、そういうのには疎いもんね」

どこか達観した様子で、健呉が意味ありげに頷く。高校二年生には見えない童顔と高校二年生には見えない大人びた雰囲気。こうして微笑んでいる裏で何を考えているかもわからない。いわゆる不思議系ってやつだ。誰か、こいつの真意を探れる人はいないものか。

「余計なお世話だ」

「しょうがねえよ、広裕は女の子に興味ないんだから」

「勝彦は黙ってる」

少なくとも、むさ苦しい男の世界に身をおいているお前の言えたことか。

「だってよー」

「まだ学園生活を送りたいんなら黙れ」

「……」

まったく、馬鹿は扱いが楽で助かる。

「あんだだけ可愛い幼馴染がいるのにな」

歯を見せて笑う聡次郎。端正な顔立ちだけあって女子にはもてるタイプの男だ。あれさえ除けばイケメンの一言で説明がつくだろう。あれの話は今関係ないのでいずれました。

「興味ない訳じゃないんだけどな……」

空に向かって呟いてみる。俺だって男子高校生。興味がないと言えば嘘になる。男子なんて妄想と煩惱の固まりだ、ってばあちゃんが言ってたっけ。嘘だけど。

「俺のことはほっとけよ……お、そういやもう一つ聞きたいのが」

俺は一旦言葉を切って 勝彦を指差した。

「どうして滑河さんが鉄研部に入っただのをお前らが知ってるんだよ！」

俺が顧問の深浦先生ふかづらのところに滑河さんの入部届けを出したのは昨日の放課後。こいつらに話した覚えはまったくない。

すると健呉が喜色満面の顔で、

「僕は人づてにだけど……朝方に深浦先生が教職員室で他の先生達に自慢してたらしいよ」

「犯人は先生か」

「っ！」

どうみても犯人は身内です。本当にありがとうございました。確かに滑河さんを自慢したくなるのもわかるけど。というか新豊学園こへの教職員の情報管理はどうなってるんだ？ 朝の教職員室の情報が今教室にあること自体、本来はおかしいだろ。うちの学校のノリの良さも伝播力でんぱりよくを少なからず手伝ってるんだろっが。

「しょうがないよ。ファンクラブもあることだし」

聡次郎が頷く。ん？ ファンクラブ？

「ファンクラブって？」

「お前知らねえの！？」

勝彦が立ち上がって叫ぶ。だから俺たちが変な目で見られるからやめろっての。しかしさっきよりこちらを見る目は少ない。あ、慣

れただけか。一部の視線が　ほとんどが男子だが　俺だけに向
いているのは気のせいだろう。多分。

「……本当に知らない？」

健呉が首を傾げて俺を怪しむ。

「本当も何も……」

昨日滑河さんの存在を知ったばかりなのに、ファンクラブな
んて知ってるわけがない。

「そのファンクラブってのは……具体的にどんな奴らなんだ？」

「えーっとねえ、滑河さんが来た当日に告白して玉砕した人たちの
傷の舐めあ……集まりが最初みたい。今はもう百人はいるみたいだ
けど」

つまり百人近くが当たって砕けたわけか。

「気をつけなよ、広裕」

急に聡次郎に肩をたたかれた。

「え、そんなに危険？」

「だってファンクラブの人って『滑河さんとお近づきになりたいよ
おっ！』って人でしょ？」

健呉が聡次郎の言葉の後を継ぐ。声まねの時は平常時いつもとのギャッ
プに吹き出しかけた。

「その滑河さんが鉄研部に入ったとなれば、みんな鉄研部に押し寄
せてくるんじゃない？」

「確かに……」

可能性は否定できない。滑河さんと一緒にいられるという意味で
は、これ以上いい場所はないだろう。だがしかし、

「可能性はないが……可能性があるだけだろ」

あくまでも鉄研部は鉄道を楽しむための部活。誰でも大歓迎ウェルカムとは
いったが、全く興味ない奴に來られてもこちらが困る。その辺につ
いて新入生には部活紹介の時に釘を刺してあるし、在校生の連中は
先代の部長のおかげで身に染みて判っているはず。去年も同じよう
な騒そぎがあつたからな。鉄道好きの女子の割合レートはかなり低く、実社

会じゃ男女比が二十対一にもならないというのに、去年の鉄研部は女子が先代の部長を含めて三人。その割合は実に二対三（そして数少ない男子の一人が俺だった）。しかも三人とも美少女だったもんだから学園中が沸きに沸いていた。もつとも、知れ渡ったのが正式な入部が決まったあとだったから噂どまりだったが。ここまでのリスクを乗り越えてまで鉄研部に入ろうとする奴がいるのか？ いたらむしろその熱意を買ってやりたい気分なんだが。

「はっはっは、そんな有象無象に構ってる余裕はないのさ！」

「はあ……やっぱり広裕は何も分かってないよ……」

俺の高笑いに健呉が肩をすくめる。

「健呉。そこ、つつこむところじゃなくね？」

「次喋ったら国外追放な」

「……………せめて市外にしてくれ」

「おい、みんな席に着けー。SHORT始めるぞー」

勝彦と他愛もないやり取りをしていると今回の元凶が教室に侵入してきた。鉄研部顧問にして我が二年六組の担任、深浦先生だ。『大人の女性』の身体つきとがさつな物言いが不思議なくらいマッチしている。

「……………お、そついえば那智」

と突然、深浦先生に呼び止められた。

「なんですか？」

「いや、滑河のことは教職員の間でも有名だからな……がんばれよ」
そう言っ肩に手を置く先生。随分と他人事のようにおっしゃいますけど。あんた鉄研部の顧問でしょうに。

「何をどうしろってんですか……」

人の口には戸は立てられぬ。広がりつつある噂の元凶を睨みつけつつ、俺は自分の席に戻った。

初めに違和感を覚えたのは校舎を出てすぐ。部室棟の手前にできた日だまりを過ぎたあたりだった。

「ん？」

「……どうしたの、広裕」

「いや……」

放課後。同じクラスの結那を連れ立って部室に向かっている途中で俺は立ち止まった。いつもならありえない光景がそこにあっただらだ。

「……なんだあの列は」

部室棟の校舎側には二階の部室に繋がる階段がある。鉄研部に行くためにはそこを通らざるを得ないのだが、階段を塞ぐ形で人の列ができていた。少なくとも二十人はいるように見える。

「……なに、あれ」

結那の足も止まる。そうだろう。部室棟は行列と無縁な場所のはずなのに。部室棟に入っている部活は、部員が五人以下の弱小文化部が殆ど。というより、部室棟に部室があることが『あ、うち弱小（文化部）なんで』と自ら公言しているようなものだ。部室棟に部室のある部活の生徒は合わせても三十人ほど。鉄研部のある二階では十二、三人といったところか。ちなみにこれはまだ先輩達がいなくなる前の数字だから今はもっと少ないはず。おまけに部室棟に用がある人間といえば、部員以外なら生徒会か先生たちぐらいしかない。二十人ばかりが階段に並んでいるなんてことは、普通ではありえない。

不思議に思いつつも俺は止めていた足を踏み出した。この列が何であろうと、階段を上がりきらないことには部室に行けない。

階段の袂に辿りつくと、さらに列の不自然さが目につく。

「どこまで続いているんだ、これ……」

階段の一段一段を埋め尽くす人の群れ。妙に黒っぽい列だと思ったら、並んでいる生徒の殆どが男子だった。黒い列は階段を上がりきったところで折れ曲がり、さらにその先へと続いていた。校舎側からは階段の先までは見えなかったから、まさかここまで長いとは

……

「もしやお隣がやらかしたか……？」

鉄研部の隣にある工学部はかなり危険な連中だ。なんせ日々爆発音が聞こえてくるような部活だ。主に電気回路を使ったものを作っているらしいが、日常的に爆発音がする時点でまず普通じゃない。過去にも工学部から煙が上がって消防が駆けつけたこともあったそう。その時は電気回路のショートが原因だったみたいだが、今全く同じことが起きても不思議じゃない。多分工学部がまた爆発でも起こして野次馬がたかってるんだろう。男子ばかりなのもそれで説明がつく。何が言いたいかというと、どうやらこの列に鉄研部は関係なさそうってことだ。

「ま、行くか」

黒い行列を尻目に、狭くなった階段を登る。元々狭い階段の幅が列のせいで一人分しかない。それでも塞がれてないだけましなんだろう。

階段を登りきったときのことだった。

「……ん？」

肩をつつかれた感覚がしたので振り向くと、

「……へ？ な、なに？」

後ろからついてきていた結那が不思議そうに俺を見つめていた。

あれ？ 肩をつついて俺を呼んだんじゃないの？

「お前、俺の肩をつつかなかったか？」

「え、そんなことしてないよ。大体……そんなところまで手が届かないし」

「え……あ」

気まずそうな目をする結那を見て、俺は気がついた。結那の頭は今、俺の腰の高さにも届いていない。元々平地で並んだとしても、結那は俺の目線ぐらいの背丈しかない。しかも、その結那は数段下にいるわけで。当たり前といえば当たり前前の話だった。

しかし、結那じゃないとなると一体誰が……と思っていたその時。
「あの……」

申し訳なさそうな声に体を逆回転。九十度を過ぎたところにそいつはいた。

「失礼ですが……那智、広裕先輩ですか？」

光沢の残る学ランを羽織った少年。結那と同じくらいの背丈からして新入生かな。手にはなにやら一枚の紙が握られている。あれ？その紙、なんだか見覚えのある気が……

「え、あ、うん、そうだけど」

『なぜ俺の名前を知っている？』などなど、聞きたいことは無数にあつたが、否定する理由はなさそうなので認めた　その直後。

「おい！　那智先輩が来たぞー！」

俺の目の前でいきなり叫びだす新入生。そして、

「本当だ！　那智先輩だ！」

「先輩！　これ、これを！　これを受け取ってくださいへぶっ！」

「押すなよ！　押すなつて！　押さない！　三段活用！　つて誰だ俺の靴を踏んでるのは！？」

「どけ！　俺が先に渡すんだ！！」

「……えっ……？」

黒い波が　黒の行列が崩れた結果　俺に向かって迫りくる。元から狭い通路が、俺に殺到する黒集団に完全に埋まる。前から後ろからも殺到して、俺はたじろぐことすらできない。誰かの足元からは悲鳴まで聞こえる。

そして全員の手には一枚の紙切れがあつた。近くの奴も遠くの奴も高々と掲げている。まるで俺に取れとでもいわんばかりに。

とりあえず目の前で押しつぶされている奴から一枚かつさらう。助けはしない。

「あ……」

「どれどれ……」

……絶句した。

『入部届』『一年』『鉄道研究部』……もっただけで何が書いてあるか十分に伝わるだろう。昨日滑河さんから受け取ったのと同じ

紙がそこにあつた。

『気をつけなよ、広裕』

今朝の健呉の言葉が脳裏にふと甦る。

『滑河さんが鉄研部に入つたとなれば鉄研部に押し寄せてくるんじゃない？』

もしや、健呉はこのことを言っていたのか。あの時は冗談かと思つて軽く流したが、今この状況では冗談とも言えそうにない。可能性はゼロではなかつたのだから。

「……ところで」

俺は目の前で押しつぶされているやつの前に片膝をついた。

「これは顧問に出すもんだが？ ん？」

押しつぶされている新入生の眼前で入部届をひらひらせると、彼は「ひいっ」と情けない声をあげ、

「……け、今朝、深浦先生のところに行ったら、『それは部長の那智君に出して』と言われまして……」

「……………」

情報漏洩の次は仕事丸投げですか。そうですか。つて、去年も同じようなことがあつたような……

先生への愚痴はひとまず置くとして、これで事情ははつきりした。要は滑河さん目当ての奴らがここに集っているわけだな？ 鉄研部に要らないどころか一番来てほしくない奴らだ。そんな邪な奴よこしまを仲間にする気は毛頭ない。もちろん、鉄道に興味があるなら考えてもいい。さすがにこれだけいれば一人か二人は純粋な入部希望者がいるだろう。

迫りよる波に押されたのか、いつのまにか俺は鉄研部の方向に追いやられていた。すぐ後ろにいたはずの結那は廊下の端に取り残されている。足元にあつた彼も誰かの下敷きになっているんだろう。彼は犠牲になつたのだ……とはいうものの、依然として俺のところに詰めかけてきている状況は変わらないわけで。

「先輩！ 受け取ってください！」

「広裕……これ、どういうこと？」

遅れて結那が俺の元に駆け寄ってきた。そういえば結那はずっと蚊帳の外だったな。まだ事情もつかめてないようだし。

「ああ、それがな……」

「あれ？ お二人さん何やってるの？」

結那に説明しようとしたところで、上市が手を振りながら何事もないかのようにやってきた。上市は俺たちの目の前に来るや否や、廊下を一通り眺めて、

「……そういえば何なのこの行列は。何待ち？」

あ、こいつにも説明しないといけないのか。面倒くせー（棒読み）。

「……まずは中に入ろう。それから説明するから。あ、上市。そいつらを入れないようにしてくれ」

「りょーかいっ」

背後の俺を呼び止めるようとする声を無視して、俺たちは部室の中に入ってしまった。

鉄の扉が閉じられると、部室は異様な静けさに包まれる。いや、本当は廊下があまりに騒がしすぎただけで、これが部室棟の本来の姿だ。俺を追い詰めていた黒集団の懇願えんさの声は怨嗟えんさの声となって、時折扉の向こうから漏れ聞こえてくる。いつもは無機質な感が拭えない鉄の扉が今日は頼もしい。

「ふーん、トッキーのファンクラブ、ねえ……」

俺が一通り話し終わると上市がうんうんと頷いた。

「って、トッキーってなんだよ」

「えー、いいじゃん。時子なんだから」

そこでようやく、俺はトッキーが滑河さんを指していることに思いあたる。滑河さんと呼んでいるから名前をもじっていることに気がつかなかった。時子だからトッキー。なんとも安直なネーミングである。

「そんな奴に入られても困るけどな」

結那が苦々しげに呟く。こいつは俺と並んで生粋の鉄道好きだ。鉄道に興味がない奴が入ったところで、結那が受け入れるとは到底思えない。むしろ全力で追い出そうとしかねないから困る。

「だから入部審査で片を付けるんだよ」

俺も結那と同じく、興味のない奴には来てほしくないと思っている。例えるなら『楽器は演奏したくないけど吹奏楽部に入りたいです』って言うてるのと同じ。部活を活気づけるどころか滞らせてしまう。

だけでも、それはあくまで個人的な感情。部長権限で無理やり入部を辞退させるわけにはいかない。

そこで入部審査だ。審査といっても、昨日の滑河さんの時のように、鉄道好きかどうかを確認する程度の雑談だ。俺たちにとっては他愛のない会話に過ぎない。が、それはあくまでも鉄道好きでの話は、過去の経験からして明らかだ。新豊学園（こい）に来てからは、鉄研部ではつちやる代わりに教室では鉄道ネタを極力振らないようにしているが。鉄道に興味があるかないかで振り分けるには最も効率のいい方法だ。

それでも結那は不満そうな顔をしていた。

「……で、その入部審査とやらはどこでやるの？ まさかここ？」

「ここ以外のどこでやるんだよ」

弱小文化部の鉄研部が、これだけの人数が入るところを借り切つてできると思ってるのか？

「大体、最終的に見るのは俺なんだから、一回で全員見きれerわけがないだろうが」

入部審査は、新年度の部活を前にしての大事な仕事だ。どのみち最後は俺に判断が委ねられるわけだが、四十人近い集団を一度に見きれerわけがない。聖徳太子じゃないんだからね。一回でも数人が限度だ。

「あ、そっか」

「んじゃ、これを持ってつてくれ」

結那が納得したところで、俺は部室備え付けのプリンターから吐き出された紙を手渡した。印刷したといっても、単に枠が連なっているだけの簡素な代物だ。

「……………」

視線を俺と紙との間で往復させる結那。

「広裕……何、この紙」

「そいつに名前とクラスを書いてもらって、今日のところは帰ってもらうように言ってくれ」

「別にいいけど……何に使うの？」

「今の時点の人員把握をしときたいからな」

今はまだ仮入部期間の最中。その二日目でこの有様だ。これから同じような輩がどんどん増えてもおかしくはない。せめて今いる奴らだけでも把握しておきたい。何もせずに帰したら明日もまた同じ事態になりかねん。

「それに……」

「……それに？」

「あいつら邪魔だし」

いつまでも部室棟の廊下を占拠しやがって。なにより騒がしいのが一番困る。

「じゃあ、それもついでに伝えてくる」

そう言って結那が立ち上がった時だった。

ボタン、と開くはずのない扉が開かれる。せき止められていた外の騒ぎが、否応無しに聴覚を刺激する。

だが、一番大きな変化はそこではない。

開かれた扉の前に立つ人影が一つ。廊下の混沌とした空気にも、部室棟のしんみりとした空気のどちらにも混じることなく、堂々と部室へと入ってくる。

鉄研部の期待の星であり、彼らの羨望せんぼうの的であり、今回の騒ぎの

中心 滑河さんだ。

滑河さんの背後では隙あらば、とばかりに黒い波が部室へ殺到しようとしていた。だが滑河さんが後ろを振り向いただけで動きはぴたりと止む。微笑んだのか、それともきつく睨みつけたのか。後ろ姿しか見えなかった俺にはどっちだったのかは分からない。少なくとも彼らがすくみ上がるような顔をしたことだけは確かのようなのだ。

滑河さんが厚い扉を閉めると、再び部室に静寂が戻る。直後に波に乗り遅れた彼らの拳の音が反響したすが、そこは鉄の扉。叩かれた程度ではびくともしない。先に彼らの拳が擦り切れそうだとか思っている間に拳の音はどんどん小さくなっていき、今度こそ本当に、部室に静寂が戻ってきた。

「ふう……まったく、何だったのかしら、あれ」

滑河さんは深く息をつきながら、長い髪を右手で振り払う。

「那智君は何か知ってる？」

鋭利な双眸が俺を見据える。穏やかな口調ではあるものの、『何か知ってるよね？』という追及であるのは火を見るより明らかだった。

「えーっと……」

抗う気力が俺にあるわけがなく、全てを話す運びとなった。

少年説明中

「……なるほどね」

俺の話を聞き終えた滑河さんが開口一番に言った。

「まったく、ファンクラブなんて誰が作ったのよ」

呆れ顔を浮かべる滑河さん。転校早々にして自分のファンクラブが出来るのはいい気がしないのだろう。呆れ顔の中にもどこか陰鬱な色が見える。

「那智君がファンクラブをつぶせば万事解決じゃない？」

「それができたらいいんだけどね……」

滑河さんの冷徹な物言いに俺は苦笑いで答えた。新人生に対してあまりに冷酷な言い方のように思える。滑河さんって実は直球ストリートなタイプなんだろうか。

問題はただ彼らが不純な動機をもつてたとしても、俺にはそれを無碍にすることはできないところだ。部長の俺には入部希望者をわざわざ跳ね除ける理由がないし、真の意味での入部希望者がいないとは限らない。つまり、

「入部審査に全てがかかっているわけか……」

先にも後にも篩ふるいにかける機会があるのは入部審査限り。最終的には俺が決めざるを得ないだろう。新豊学園鉄研部部长としても、そして一人の鉄道好きとしても。まさかこんな早くから胃の痛くなる仕事があるとは思ってもいなかったが……

「広裕、書かせてきたよー」

とその時。外に出ていた結那が部室に戻ってきた。

「おお、サンクス」

結那から例の紙を受け取る。白紙同然だった紙が、八割方文字で埋められていた。

「よし」

俺は改まってテーブルに就く残りの三人に目を向けた。昨日のお茶らけたノリではない。緊張した面持ちで左右に見渡すと、三人とも真剣な眼差しで俺の方を向いていた。

「今、俺たちは苦難の道に立たされた。鉄道好きでない奴で部員数を上げるか、鉄道好きを入れて少人数でやっていくか……俺は、後者でやっていきたいと思う」

三人が力強く頷いた。

「だからこそ新人生はしつかりと絞っていききたい。そのためにはみんなの協力が必要だ。いいな？」

再びの首肯。

「それじゃあ、鉄研部の安泰のために！」

『おー！』

各部活が新入生をぶん取りあう仮入部期間。その中で新入生を落とすという、新豊学園始まって以来初めてのプロジェクトは、こうして幕を開けたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6530u/>

みんな学ぶ気です？

2011年8月8日03時21分発行